第二回「生産論」（1982. 6. 29）

司会（小湊）　それでは二回目の研究会を行いたいと思います。今回は永谷さんにレポートをやっていただきまして，そのあと大内先生からそれに対するお答えまたは解説をいただきたい。そして，そのあとみなさんから自由に質問なり討論をやっていただきたいと思います。

報告者（永谷）　では，第二篇生産論のレポートをいたします。

この部分は，資本の生産過程・流通過程・再生産過程からなり，実体規定をうけた価値の次元をなしています。これを明確にしたのは『資本論』一・二巻を再構成した宇野『原論』で，大内『原論』もこの体系構成を出発点としています。鈴木編『原理論』以来，宇野理論では広くこの構成が受け入れられているのですが，生産論が価値の次元といっても，その理解内容は宇野『原論』とはかなり違った面が種々展開されてきています。それは端的には，「価値どおりの売買」ないし等価交換が否定されることになった点に示されていると思います。ある意味では生産論は現在の宇野理論にとって，もっとも問題をはらんだ部分ではないか，とさえ思われます。もし優ぐれた論客が反宇野派にいれば，徹底的に批判されてしまいかねない致命的な問題があるのではないか，そういう危機感もあって，最近新著を出したのですが，大内『原論』が価値の次元をどのように解しているかが，私の最大の関心事です。しかし，これは大きな問題ですので最後に回して，まずテクストに則って問題を提出します。

第一章　資本の生産過程について。

①　大内原論では，資本の生産過程は第一節労働＝生産過程と価値形成＝増殖過程，第二節剰余価値の生産，第三節賃銀形態の作用，の三つに分けられています。この部分は宇野原論以来，一般に第一節労働＝生産過程，第二節価値形成＝増殖過程，第三節資本家的生産方法の発展（ないし展開），とされてきたのですが，その変更の理由は何でしょうか。

このやり方は『資本論』に近い印象を受けます。宇野の場合，労働過程，価値形成過程がそれぞれ有用労働と抽象労働に一面的に矮少化される性格の強かった『資本論』を批判して，それらを両者を含んだものとしてそれぞれ自立化させる，という意図が強くあったと考えられます。両過程への理解では宇野原論と同じである大内原論が，なぜこの変更をおこなうのか興味があります。絶対的・相対的剰余価値の生産と賃銀形態が宇野原論よりも「格上げ」された感がありますが，反面，労働＝生産過程と価値形成＝増殖過程が「格下げ」された感があります。

②　必要労働・剰余労働が社会一般的なものであると考えられているのに価値形成過程ではじめて説き（249頁），労働＝生産過程でなぜ説かないのでしょうか。『資本論』では，労働過程において労働の二重性，社会的労働配分，剰余労働，等は明示的に説かれていないのに対して，宇野原論がはじめてそれを説き，その後この方法が広く継承されてきました。「貨幣の資本への転化」では労働力商品は説明されず，価値形成過程で説かれるというやり方と関連があるのかもしれませんが。

③　労働価値説ないし価値法則を，商品論ではなくて価値形成過程ではじめて説くという方法を，宇野原論から踏襲していますが，宇野の論証法に満足しているわけでなく，独自の工夫がみられます。そしてこれまで一部にみられた等価交換の否定という試みを排除して次のようにのべています。

「資本主義は，直接生産者にたいしてはかな

らず必要労働の生産物が確保されなければならないという原則的関係を，A—G—Wという商品交換において，その両端を形成する商品の価値がその生産……に必要とされる労働量を基準として決定され，両者のあいだに等価交換＝等量の労働の交換がおこなわれる……」(250頁)

たしかに価値法則成立の基礎は，A—G—Wにあるといってよいでしょうが，その意味を，労働力商品Aには必要労働が対象化しているわけではないので，AとW「両者のあいだに等価交換＝等量の労働の交換」というのは，まだ問題を残しているのではないでしょうか。

④　「一　絶対的剰余価値の生産，二　相対的剰余価値の生産，三　機械制生産による資本主義の確立」という構成は，まとまりがよい気がします。第二節を占めるようになった理由とも考えられる（この一節，二節の構成の仕方は日高『原論』と酷似)。しかし，第三節賃銀形態の作用は，第一節と第二節に対してどのような論理的関係にあるのでしょうか。「賃銀形態の作用」では一・二節に対して過大評価の感じをうけます。宇野『原論』では第三節は資本家的生産方法の展開となり，そのC労働力の価値の労働賃銀への転化の(3)で賃銀形態が登場します。これでは賃銀形態の過少評価であるという判断があるとおもわれます。ちなみに，鈴木『原理論』，日高『原論』も第三節を賃銀論としています。

第二章　資本の流通過程について。

⑤　従来誰もが認めていた資本循環の三形式（G……G′，P……P，W′……W′）を否定する，という大胆な試みがまず注目されます。産業資本的形式$G-W\begin{cases}A\\P_m\end{cases}\cdots\cdots(P)\cdots\cdots W'-G'$のなかの貨幣資本，生産資本，商品資本として論ずるだけで充分であるという主張です（317頁)。これは最近一部にみられた資本循環の三形式の過大評価（例えば，資本の流通過程をこの三形式で区分しようとしたり——鈴木編『原理論』，生産論の三章にふり当てようとしたり——侘美氏）の試みに対するアンチ・テーゼのようにみえますが，新たな問題を生んでいないでしょうか。資本の流通過程を一貫して流通論で与えられた産業資本的形式をそのまま固定して展開しよう，というのが本書の方法のように見受けられます。「とくにこれを貨幣資本の循環として捉えなおさなければならないという理由はない」(319頁）と述べられるのもこのためでしょう。しかし，これでは産業資本的形式，資本の流通過程，利潤論が単純に一律に処理されることになる気がします。同じ産業資本であっても三者は，流通形態論，生産論，分配論という相異る三次元に属しているのでして，このような単調な処理は許されないのではないでしょうか。資本という運動体の実体が資本の生産過程で明かにされることによってはじめて資本循環がG……G′につきない三面として明らかになり，G……G′（貨幣資本の循環形式）もこの三面の一つとして規定しなおされる必要がでてくるのではないでしょうか。それは産業資本的形式論でも利潤論でもなしえない資本の流通過程の特質を示しているように思われます。

⑥　資本の流通過程の第三節が流通費用とされ，その理由が流通費用は「資本の循環のために必要というよりはむしろ資本回転のために必要である」（337頁)，ということに求められているようです。もともと資本の流通過程の第三節を何にするかは，『資本論』第二巻のこの部分が資本の再生産過程に移された宇野『原論』以来の懸案のように思われます。剰余価値の流通でも問題が残っている感じがします。第三節を流通費用とする試みは日高『原論』にすでに見られますが，日高氏と異なり第二節で資本の回転をとく大内『原論』では，流通費用を捨象して資本の回転をとく是否が問題になるでしょう。また，日高『原論』とともに，剰余価値の流通を欠いて資本の流通過程論が充分かどうかも問題になるとおもいます。

第三章　資本の再生産過程について。

⑦　本書は，鈴木『原理論』や日高『原論』と同じく，まず第一節を再生産表式論で始めてい

ます。宇野『原論』のように蓄積過程論の後に表式論という方法をとっていません。その理由は何でしょうか。資本の流通過程とのつながりが「自然」(350頁）ということを理由の一つにしていますが，商品資本の循環形式ではなく，商品資本の流通から出発する，とされていますが，それがどうして「自然」なのでしょうか。あるいは蓄積過程を先に説くことがどう不自然なのでしょうか。

⑧　生産論は静態論であり，価格変動ばかりか景気変動，したがって蓄積過程も説くべきでないという主張が最近一部に出ています。しかし，本書がはっきりと「恐慌の基本規定」をここで説くべきことを主張しているのは優ぐれているとおもいます。鈴木『原理論』や日高『原論』でも一応説いていますが，故意に恐慌という言葉を避けていました。しかも前二書が，蓄積過程を人口法則に関してのみ取り上げているのに対し，本書は労働力商品の価値規定についても言及しています。この点も優ぐれていると思います。しかしそれも「第二節資本蓄積と人口法則，第三節資本主義的蓄積の一般法則——景気変動と恐慌」の二つに分けて論じている点に疑問が残ります。人口法則も「景気変動と恐慌」に言及しないでは説きえません。両者は重複してしまっているのではないでしょうか。

「恐慌の基本規定」で労働力商品の価値措定ができることが，表式論の後に蓄積論を説きそれを生産論のしめくくりとする理由のようにみられます。しかし，むしろ蓄積過程で人口法則と労働力商品の価値措定がなされてこそ，表式論も展開できるのではないでしょうか。

⑨　最後に生産論全体について。

利潤論を基本とする分配論（『資本論』第三巻に相当）が生産価格の次元であるのに対し，生産論を（実体規定をうけた）価値の次元と呼ぶのは，良いのですが，その内容の理解については宇野理論内に大きな混乱があります。価格の捨象された価値の次元と解すると，価格表現や価格変動が捨象され，静態論になります。分配論＝個別資本という対比から，生産論＝総資本と解されると，生産論では個々の資本やその間の個々の商品の売買は捨象されるとされたり，総商品の価値規定が与えられるだけで個々の商品の価値規定は捨象されているという主張（日高『原論』がその典型）も現われました。生産論での等価交換の想定が古典派の残滓として排斥されたのもこれと関連があります。

本書は，「すべての商品は……労働量によってその価値を規定され，それにもとづいて売買されるものとしていい」(257頁）としながらも，そう考える理由を「全商品を一体としてみれば，その総価値が……労働の合計として与えられる……生産論の次元では商品の価値がすべて労働量によって規定されるものとするのは，こういう総体的関係の代表単数として抽象的に捉えるから」(258頁）としています。個々の商品＝生産価格，総商品＝価値と言っているわけではないが，「代表単数」という考え方に日高説の一定の影響をみることができる感じがします。総生産価格＝総価値というマルクスの命題が成立するのであれば，一応それもよいように見えますが，この命題は現在では問題があることがわかっています。利潤論でも，個々の資本の競争を介するとはいえ，総体的な剰余価値の利潤としての配分がなされるのであり，生産論とは別の意味ですが「総体的関係」が問題なのであり，そこから一商品を「代表単数」として抽象しても，それは生産価格で規定されたものでしかない，という反論もありうるのではないでしょうか。あるいは，個々の商品の価値規定がまず成立しえないで，どうして「全商品を一体」とした「総価値」がまず成立しうるのか，という反論もありうるでしょう。生産論で個々の商品の価値規定が抽象されうる論拠は，本書でもまだはっきりしていないのではないでしょうか。以上です。

司会　ありがとうございました。では大内先生，どうぞ。

大内　いずれも大問題で，すぐに片付くというわけにはいかないでしょうが，とくに最後の

問題は下巻の生産価格論を検討していただく際に一緒に考えた方が私としてもやりいいと思いますので，この点は次回にまわしていただいた方がいいかと思います。では今の問題提起にできるだけ即して多少私の考えたことを敷衍して申し上げたいと思います。

最初の，資本の生産過程をどのような編別構成にするかという点は，おっしゃるとおりいろいろな流儀がありますし，いろいろな考え方があるかと思います。ただ——これもいささか宇野先生以来の余技みたいな話ですが，なるべく三つずつ柱を立てる，四つ立てるのはやめよう，という考え方をして，三つずつに整理してみたわけです。これは一種のいたずらみたいなもので，三つでなければどうしてもいけないというほどの根拠はないのだろうと思いますが。

その中で，あとで申しますような理由から，賃銀形態論というのをもう少しきちっとおさえておかないと，一つには次の資本の流通過程につなぐ場合に問題が生ずるのではないかということと，それから，もう一つ，あとで下巻で分配論を説く場合に，賃銀形態論が従来きちっとおさえられていなかったためにいろいろ混乱が生じているのではないかという判断があった。そこで，賃銀形態というのを生産論の最後でおさえておきたい，と考えた。それがこういう章立てになった理由です。

この点に関連して，永谷君の提起された問題の④をはじめにお答えすることになりますが，ここを賃銀論といわずに「賃銀形態」とし，しかも「賃銀形態の作用」という題名をつけたのは，多少私なりに工夫をしたつもりなのです。この「作用」というのはどういう意味かと先にご質問を受けたのですが，この作用というのは，まず第一には，第二節を受けて，「剰余価値の生産」を資本の側からいって円滑にするために，つまり労働者の抵抗をなるべく少なくして，いわば自動的に剰余価値の生産の拡大が行われるようにするために，賃銀形態が一定の作用をもっている，という意味です。したがって第二節で展開した関係をもういっぺん第三節で受け直すというかたちにしているつもりです。

ここで多少関連があるので横道にそれますが，ご承知のとおりとくに絶対的剰余価値の生産のところで，マルクスもそうですが，とくに鈴木『原理論』になると——これはおそらく岩田弘君などの説が鈴木『原理論』にまぎれこんだのだろうと思うのですが——一種の強力説的説明が非常に強くなっていますね。つまりまさに労働者の抵抗があることによって労働日の長さがある範囲に規定される，という考え方です。これにたいし日高君は全くそれを逆にしてしまい，労働者の抵抗があろうとなかろうと，労働力の価値規定のなかにおのずから一定の労働時間の規制が含まれているというわけですね。このどちらもあまりうまい説明の方法ではない。むしろある一定の賃銀形態が与えられることによって——もちろん抵抗も多少はあるのでしょうが，抵抗を最小限にしながら資本の法則性が自動的に貫いていくという点をもう少し明らかにすべきではないか。賃銀形態を強調した一つの狙いはそこにあったわけです。

それからもう一つは，資本の生産過程から資本の流通過程へ論理をつなぐ，それからさらに再生産過程を媒介にして次の分配論につないでいく——そのつなぎ方の問題です。いうまでもなく分配論までいくと形態規定が表面に出てきて，実体的な関係が形態によっておおわれる，したがって現象形態からみると実体的な関係が隠されているという関係を説かなければならないことになります。しかし，こういう顚倒した関係は，実は流通過程論からはいってくるのですね。つまり，剰余価値を増大させるのが労働の搾取率ではなくなり——というより，実体的な関係としては労働の搾取として現われるものが流通過程論では資本の回転の中に解消される傾向があるわけですね。回転を早めれば剰余価値率が高まる，遅くなれば低くなる——むろんそこには流通費用も関連しますが——，というような形態的な関係によって剰余価値の生産の本質がおおわれるという関係が出てくるわけです。ところでこの，おおわれる関係のもう一つ

前段に賃銀形態の成立があるといっていいでしょう。つまりそれによって，労働にたいしてはそのすべてが支払われ，全労働が支払労働であるという形態が成立するのですね。そのために剰余価値の本質がまずぼかされる。その上で，今度は，剰余価値がいわばその根拠を明らかにされないままに，資本の価値増殖分という外観を与えられ，それが回転によって左右されるものとしてとらえ直される。そしてそのことを根拠として，分配論にいくとはじめて利潤概念が成立しうることになるのではないか。こういうふうに考えて，そこのところの媒介項として賃銀形態を生産論の締めくくりにしたのです。いいかえれば，ここで実体的な関係に一定の根拠をもちながら，その中にすでにそれを形態化して，実体的な関係をおおいかくすような関係が必然的に現われてくる，それが賃銀形態の作用だということを説いておく必要がありそうだと考えたわけです。

そこで，第三節に賃銀形態をもってくるということがこのようにしてまず決まってきますと，あと残った二つをどういうふうにくくるかという話になるわけです。ところで，第一節で労働＝生産過程と価値形成＝増殖過程を一緒にしたのは，別にそれを格下げして，賃銀形態を格上げするというつもりではありません。私は宇野先生の『原論』を読んだ時，労働＝生産過程と価値形成＝増殖過程をきちんと区別したということは——マルクスの場合には両方がかなりごたごたになっている面があるのですが，それを概念的にきちっと整理しなおしたというのは宇野先生の大きな功績だったと思ったのですが，ただ，これを二つの節に分けると，価値形成＝増殖過程を背後から支えている実体的な関係，したがって資本主義的には価値形成＝増殖過程としてとらえるしかないのですが，それを背後から支えているのは原則的な労働＝生産過程だという関係が，かえって説きにくくなりはしないかという感じをもちました。そこで両者をある程度区別しながら，しかし同時に，まず労働＝生産過程を説いたあとで，それを価値形成＝増殖過程というかたちでくくり直す，こういうやり方ができないものかと考えたのです。十分旨くいったかどうかはわかりませんが。その点に関連して今永谷君が出された問題②，何故必要労働，剰余労働の区別を労働＝生産過程の方で説かないで価値形成＝増殖過程の方で説いたのかという点ですが，これは実は前の「貨幣の資本への転化」からつながっている問題ではないかと思います。つまり，『資本論』でもそうですし宇野先生の場合でもそうですが，前の流通論の最後のところですでに労働力商品を出してしまい，かつ労働力の商品化といいますか，あるいは労働と資本との交換関係の中に剰余価値の根拠があるということをいってしまうのですね。そこで，これらでは，流通論の最後のところで実体的な規定が与えられてしまうというかたちになっている。前に議論したように，私はそれを避けて，流通論と生産論との関係をすっきりさせたいと考え，前の「貨幣の資本への転化」のところでは労働力の問題を意識的に落としてしまったのです。そうなると，労働力の商品化とそれを根拠とした資本による剰余価値の生産をどこで説くのかといえば，やはり労働＝生産過程ではなく，それが資本の生産過程というかたちにかわった価値形成＝増殖過程しかないでしょう。その時にはじめて必要労働は労働者に支払われ，そして剰余労働部分が剰余価値の根拠になる，という関係を説きうるようになるわけです。もちろん，ふりかえって考えてみれば必要労働，剰余労働というのも実体的な関係ですから，強いて考えれば労働＝生産過程の中にも含まれているといっていいでしょう。ですから奴隷社会でも，あるいは原始共産体でもそういう区別があったといえばあったに違いないし，社会主義社会にもあるはずです。しかし私の理解では，そういう一種の分配関係，つまり価値生産物——あるいはまだ価値が出てくる前の論理段階でいえば，いわば純生産物ということになりますが，そういう純生産の分配というのは労働＝生産過程で説く必要はない。労働＝生産過程というのはもっと基本的に，人間が

自然にたいして働きかけて使用価値を生産する，それを生産するために人間が一定の労働を支出しなければならない，その支出する労働は二重性をもっている，つまり具体的＝有用労働と抽象的＝人間労働という二重性をもって支出されている，こういう関係だけを説いておけば足りるのです。そういう実体的関係を今度は資本がとらえて資本の生産過程とする，そうするとはじめて，純生産が今度は価値生産物というかたちでとらえ直され，その価値生産物の必要労働と剰余労働への分配という問題が登場する，こういう論理構成になっているのではないかというのがここでの理解の仕方です。

ですから労働＝生産過程というのは，そういう意味で，実体的な関係をできるだけ抽象的にといいますか，必要最小限で説けばいいのでして，それ以上に，資本主義のもとで現われる諸関係にも実体的な裏付があるから，同様の関係がどういう社会にもありうるというようなところまで具体的に説く必要はない。いわば原則的な関係を非常に抽象的に明らかにしておけばいいという考え方をしているわけです。本来，労働＝生産過程というのは，原論の直接の課題ではなく，ただ価値形成＝増殖過程を説くための前提にすぎないのですから。

次に問題③，つまり「価値法則の確立」についてですが，この点は次のように考えているのです。A—G—Wという関係を考えた時に，Aの方にはA自体の中に具体的労働が体化されているわけではない，必要労働が対象化されているわけではないという点はおっしゃるとおりですが，ここでの問題は，むしろ，労働を基準として商品交換がおこなわれざるをえないという関係は，Aを媒介としながら，GとWとの交換関係にあるという点が重要なのです。つまり，労働力の再生産のためには必ず一定の労働時間が必要であるというのが一番基本的な実体的な関係ですね。つまり，いかなる社会でも人間は自分自身の労働力を再生産するためには一定の労働時間を必ず必要とする，という実体的な関係があって，それを資本家的な形態の中で処理しようとすると，AにたいしてGが支払われる，そのGが常に労働力の再生産に必要な労働時間を含んだ商品を買戻しうるものとして与えられなければならない，それゆえにGとWとの交換関係は常に労働時間を基準として決定されるというところに価値法則の基礎があるのです。ですから，分配論の段階まですすむとGすなわち金もむろん生産価格をもちますし，Wも生産価格をもちます。ですからG—Wの数量的関係は価値次元とは違ったものになるかもしれませんが，それがどう変化しても，それは単なる名目的な変化にすぎない。GとWの交換関係は常に労働時間を基準としてきめられるしかない，そしてそれによってWの価値も総体的には労働時間を基準として決定されるということになるわけです。

ですから，Aについてはもちろん労働力の価値という概念は使いますが，それはA自体が労働によって再生産されているととらえているわけではけっしてない。必要労働というのは，労働力の再生産のために必要とされる生活資料Wの生産に必要とされる労働なのです。宇野先生の場合もそうなっているでしょう。私はそう理解してきたのですが。

永谷　ええ，だけどここがちょっと問題がある感じがいつもしているんですがね……

青才　等価交換または等価値交換ということであれば，ともに労働力の価値だという意味ではAとWとの間でも等価交換が成立していると言ってもいいわけですよね。そこのところを「等量の労働の交換」と書いてあるから疑問だということなのではないでしょうか。

永谷　青才君のいうのはおそらく等労働量の交換はまずいけれど等価値交換ならAとWの間でもいいんじゃないかということでしょう。

大内　いや，労働力の価値規定というのはたいへんニュアンスに富んでいる。だからある意味では一番アンビギアスでつかみどころのないものですね。しかも労働力が直接労働によって生産されているわけではなく，必要労働も間接的に，生活資料を媒介にして規定するしかない。

こういう性質をもちながら，今いったように，基本的には，労働力の再生産ができない限りはいかなる社会も成立しない，したがって労働力の再生産に必要な労働生産物を労働者に与えるという関係は常に維持されなければならないという絶対的な根拠があるのですね。価値法則はそれに支えられることによって，絶対的な基礎を与えられるわけです。その関係を商品交換の中で現わせば，労働者が賃銀としてもらった貨幣で必要な生活資料が常に買戻せる，こういう関係が常に保証されていなければならないということになるわけです。

永谷　宇野さん以来買戻し論というふうにいっているんだけれど，しかしこの買戻し論というのは一人一人問いつめていくとみんな自分勝手に解釈している……

大内　どちらかというと買戻し論の時に，Aを直接価値みたいに考える人が多いのかもしれませんね。

永谷　ええ多いですね。

大内　私はちょっとちがうのでして，少しそこを間接的にして，労働力の再生産を媒介としながらG—Wの交換が価値によって規定されると考えているのです。

青才　のちの生産価格論の議論とかかわる訳ですが，私は大内さんの場合，実際には個別商品の交換は価値通りになされる訳ではないという考えが背後にあって，A—G—WのAとG，GとWとの交換は価値どおりではないが，その取引全体の結果としてAとWという両端では等価値交換が成立する，という点をいわれている，と読んだのですが。

大内　ある意味ではそうですよ（笑い）。つまり今いったように，労働者にたいしては必要労働の生産物に相当する生産物を常に渡さなければならないという限りでは両端がまず規定されているといっていいのですが，資本主義社会では労働者は現物給付を受けているわけではない。ですから，賃銀としてもらう貨幣が必要生産物を買戻せるかどうかというところが決定的な意味をもつと思うのです。価値法則もそこでおさえるしかない。

それから，ついでにちょっと蛇足を加えておきますと，少し検討をしていただきたい点なのですが，ここでは価値法則を——これも実は宇野先生から学んだのですが，三つの側面があるものと考えています。これは宇野『原論』にはあまりはっきりでていないのではないかと思います。よく読めばそう書いてあるのだろうと思うのですが，私はむしろ宇野先生と研究会でたびたび議論しているうちに，宇野先生の価値法則には三つの側面があるということを学んだのです。それをここでできるだけ生かしたいと思ったのです。三つの側面というのは一つは，商品と商品の交換関係を規定するという面，二つ目は，したがって，生産力の変化に応じて価値関係が変化をするというところに価値法則の作用があるという面，それから三つ目は，社会的な労働配分自体を規定するのが価値法則だという面ですね。価値法則について，こういういわば三面等価みたいな議論が宇野先生にあるのですね。しかし，それをどう説明し，どうやって一元的にとらえるのかというのはちょっと厄介な問題です。ここではひとまずその三つの側面を「価値法則の確立」というところで説いておいて，あと下巻で，価値の生産価格への転化を説く時にその問題をもういっぺんとらえ直すというやり方をしたつもりなのです。この一つの側面はむしろ価値と生産価格論の関係という問題としてあらわれてくるわけですが，この本では，この関係を総価値＝総価格というかたちではおさえないで，むしろ総剰余価値＝総利潤というかたちでおさえるべきだと考えています。つまり，この関係の底には実体的な関係がある。というのは，分配される総剰余価値はすでに資本と労働との交換関係の中で規定されているのですね。労働力が価値どおりに売買される，そして必要生産物が労働者に与えられる。したがって，実体的にいえば総剰余生産物量が必然的に決まる。あるいは価値ベースでいえば総剰余価値量が決まる。あとは資本がそれをどういう比率で分配しようとも全体は同じだ，とこうい

う形でおさえておくわけですね。それが生産価格論における価値法則のひとつの作用です。

それからもう一つは，生産価格を通じて実は労働の社会的配分がおこなわれる，あるいは資本の配分がおこなわれるといってもいいのですが，しかしそれを通じて結局おこなわれているのは労働の配分ですね。ところで，その労働の配分というのはまさに実体的な関係を基礎にしなければできない。そこに生産価格が背後から価値によって締められている，という関係がある，ということで価値と生産価格との関連をつけたいわけです。実はそういう伏線があって，この「三」の「価値法則の確立」のところを書いてみたのですが，どうも今読んでも少しこの三つがややばらばらになってしまったような感じはのこります。しかし，ここの説明は非常にむずかしい。どういうふうに説明したらいいのかまだ少々ふっ切れないのですが，まあそういう考え方が背後にあるということを読みとっていただきたいのです。

それからつぎは第二節ですね。第1の問題は何故ここに「剰余価値の生産」という名前をつけたかということですが，これは270頁の註52で，マルクスに関連して，ターミノロジーの議論をしておきました。だいたい絶対的剰余価値の生産とか相対的剰余価値の生産というのはある意味ではわかったようなわからないような，変ないい方ですね。私もある時期には，絶対的剰余価値の生産とか相対的剰余価値の生産といういい方はやめて，むしろ絶対的とか相対的とかいうのは，剰余価値の生産方法の相違なのだから，剰余価値の相対的生産とか剰余価値の絶対的生産といったほうがまだわかりいい，と考えていたのです。宇野先生の『演習経済原論』で，たぶん大谷瑞郎君だったかと思いますが，同趣旨の質問をだしていますが，それにたいして宇野先生は，いやそうじゃない，やっぱりマルクスの扱い方でいい，という議論をされていますね。また，日高『原論』の場合には，明らかに剰余価値生産の絶対的方法とか相対的方法というふうにしてあると思います。しかし私はもう一度宇野先生に戻ってしまったのです。というのは，マルクスがいうところの剰余価値の生産というのはきわめて含みのあるいい方でして，剰余価値そのものがどうやって生産されるかという側面とあわせて，生産された剰余価値そのものがいかに変動するかという点も剰余価値の生産という概念の中に入れていると思われます。だから，絶対的剰余価値の生産とか相対的剰余価値の生産というのは——だいたい絶対的剰余価値と相対的剰余価値の区別がマルクスの場合非常に判りにくくて，絶対的剰余価値というのが剰余価値の一番基礎である，つまり剰余価値というのは常に必要労働時間以上に延長された労働時間の産物であるという意味において，剰余価値は常に絶対的剰余価値であり，その量的な変動が相対的剰余価値の生産である，という考え方がマルクスには一面ではあります。しかし他面では，生産方法を二つに区別して，労働時間を絶対的に延長する場合と必要労働が短縮される場合とをあげるという考え方もあって，それをこみにしたような形で絶対的剰余価値の生産，相対的剰余価値の生産，という柱立てにしたものですから，『資本論』は非常にわかりにくくなったのでしょうが，しかしそれはそれなりになかなか含みがあっていいつかみ方だと考えたのです。そこでここで剰余価値の生産という言葉を使ったのは，剰余価値そのものの規定はもちろん前の価値形成＝増殖過程で与えられていますし，剰余価値そのものがいかにして作られるかということだけを問題にするのだったら，もちろんそこの所で剰余価値の生産として説きうる。しかしそういう一般的な剰余価値の規定をふまえて，ある場合には剰余価値がより多く生産される，ある場合には全然生産されないかもしれない，こういう変動を説くとなると，やはりこれもマルクス的な用語法に忠実に従って剰余価値の生産といった方がいいのではないか，ということでここでは「剰余価値の生産」という言葉を使ってみたわけです。ただこの註52に書きましたように——あるいはもっとたんねんに捜せばいろいろな議論があるの

だろうと思いますが——まだ概念そのものが少し曖昧なままで残されている面があり，その曖昧さ，あるいは多義性が「剰余価値の生産」という言葉の多義性にもなってきて，なんとなくわかったようなわからないような感じがのこるのでしょう。

青才　絶対的と相対的というのを抜いた感じの剰余価値の生産という……

大内　両方含めて，むしろ量的変動のことをも剰余価値の生産ということの中に含めたということですね。非常に厳密にやるのだったら，あるいは，剰余価値の基本規定——それを剰余価値の生産といって，それからその基本規定の上に立って，量的な変動は例えば剰余価値の変動とでも名付け，その変動をまた絶対的方法と相対的方法というふうに分けるというやり方もあるかもしれません。しかしそういうふうに分けてしまうと，先にいった，剰余価値はいずれにせよ絶対的剰余価値なのであって，必要労働時間以上に延長された労働時間の産物であるという限りにおいては常に絶対的剰余価値の生産を根拠にしている，といった関係が今度は機械的に切り離されてしまい，かえって剰余価値がつかみにくくなる。僕は日高君の欠点はそこにあるのじゃないかと思うのです。ですからこの二つの関係を一つにうまくあわせて説きたいのですが，逆にあわせると概念として少し曖昧になるということはあるでしょうね。

永谷　マルクスの場合には，先生の第一節にあたる労働＝生産過程と価値形成＝増殖過程のところが絶対的剰余価値の生産という言い方になって，そして先生の第二節にあたるところがいわばもういっぺん絶対的および相対的剰余価値の生産という感じの項目の立て方になっていますね，だから先生のとらえ方だと例えば第一節は剰余価値の生産，第二節は剰余価値生産の展開（笑い）というんでいいのかなという感じもするんですが，そうすると問題ですか。第一節のタイトルのすわりがちょっと悪い感じがしますね。「労働＝生産過程と価値形成＝増殖過程」という……

大内　そうかしら。だけど本来の生産論の一番のメドは極端にいえばここだけなんですね。つまり，労働＝生産過程という実体的な関係を資本の形態の中に包摂しているという関係が明らかになり，それによって価値増殖が行われるという，それだけいえればある意味では生産論はすんでしまう。

永谷　ええ。そんなら宇野さん流に第一節が労働＝生産過程，第二節が価値形成＝増殖過程でいいんですけれど，先生の場合にはそれに賛成されてないもんだから……。第一節に二つが入ってきちゃうわけですね……。

大内　たしかに節という意味では二つが入ってるけど，その中の項では一応別々に分けて考えているのです。だからそれも悪いといわれれば何とも返事のしようがないのですが，第三節の「賃銀形態の作用」というのをどこかの節へうまくくりこめれば，あるいはこれを第四節にしてもいい（笑い）ということになれば，そうしてもかまわない……

青才　第三節を，一，絶対的および相対的剰余価値生産，二，協業，分業，機械制，三，労賃形態，という構成にすることはできないですか。

大内　そうかなあ。賃銀形態というのは先にいったように，もう少し重要性があると思っているのですけどね。

青才　重要性という点には私も賛成なんですが，ただやっぱり労働＝生産過程と価値形成＝増殖過程とは，ちゃんと切っちゃった方がいいと思うのですが。

大内　もちろん切った方がいいんだけど，切りつつ統一しなければ（笑い）ならないんですね。だから，第一節の構成は私のつもりでは，一と二をまず説明しておいて，三の価値法則のところでそれを統一する——統一するという意味はとくに生産力の変化によって価値関係が変化をするという点にあるのです。生産力の変化というのは労働＝生産過程の問題ですね。しかしそれが価値関係を変え，剰余価値の量にも影響を及ぼす，そこでこの両者の関連が明確にな

るわけです。だから皆さんからいろいろ疑問がでてくるのは，むしろこの価値法則のところがあまりうまく説けてないせいかもしれません。もう少しここはうまく説く方法があるんだろうと思うのですが，なかなか知恵が働かない。

さあそれではあと何か，第一章に関して問題がありますか。

司会　そうですね，第一章に関してほかに質問があれば先に議論していただいて，そのあと第二章に移るというふうにしたいと思います。それではどなたか質問を出して下さい。

青才　第二節の構成の仕方について質問します。永谷さんはレポートで第一節，第二節の構成の仕方は日高『原論』と酷似していると言われているのですが，第二節の内部にはいると——標題としてはわりと同じなんですけれども——日高さんの場合は単純協業，分業，機械制度を全部3の「機械制工業」の中に入れているのに対して，大内さんの場合には「相対的剰余価値の生産」の中にそういう生産力的な問題は入れて，三ではどちらかというと生産関係的な問題を説くという形になっており，内容的にはちがっています。そうなさった意図みたいなものを少し伺いたいのですが……

大内　意図みたいなものというのは，どういうことですか。

青才　大内さんの場合には，マルクスや宇野さんと同じく「相対的剰余価値の生産」のところで協業・分業・機械制を問題にされている訳ですが，そうした場合には，協業や分業においても絶対的な剰余価値の生産が問題になるという側面が落ちてしまうのではないでしょうか。私は，日高さんのように，まず最初に，絶対的な剰余価値の生産と相対的な剰余価値の生産の概念規定を与え，次に機械制大工業の構成部分として協業・分業・機械制を取り上げ，そのおのおのについて剰余価値の絶対的な生産方法と相対的な生産方法との双方を問題にすべきだと思うのですが。

大内　ですから三の「機械制生産による資本主義の確立」というところでは両方扱っているつもりなのですが。とくに絶対的剰余価値の生産は労働強度の増大というかたちと，それから早い時期にはもちろん婦人幼年労働や深夜業などもそうでしょうが。

その問題には，おそらくこういう問題が一つからんでいるのじゃないかしら。マルクスのいう，協業，分業およびマニュファクチェア，機械および大工業といった並べ方が，一体何を意味しているのかというのはちょっとおもしろい問題で，日高君の場合には，あれを非常に，できあがった資本主義的生産の要素みたいに考えている。

永谷　そうですね抽象面としてとらえている。

大内　だから協業や分業というのも資本主義的生産の中の一要素としてだけおさえて，したがっていきなり機械制生産をスポッともってくるのですね。確かにそういっていい面はあるのですが，これにたいして，マルクスの場合は叙述の仕方はかなり歴史的な説き方になっていますね。その場合私に興味があったのは，協業というのはある意味で超歴史的でいかなる社会形態においても現われてくるでしょう。分業もある意味では超歴史的ですがマニュファクチュアということになると非常に歴史性をもってきますね。おそらく機械制ということになるともっと限定された歴史性がある。まさに資本主義社会でなければ——のちの社会主義になれば別でしょうが，さしあたりは——機械制ができないし，逆にいえば機械制生産が確立されないと資本主義も確立しないという歴史限定的な性質がある。こういう関係を原論のどこかに反映させようとするとどういうことになるだろうか，という点に多少興味があったのです。そこで，協業とか分業とかというのはひとまず生産性を上げるためのいわば技術的な方法ということで説いておいて，最後の段階の機械まできたところで，それ自体が資本主義の確立という歴史的な過程と表裏の関係にある，ということをもういっぺん説く。それによって機械自体の中に資本主義的性格が一番ヴィヴィッドに現われている，ということを明らかにしようと思ったのです。

そういう意味で，日高君が考えるほどこの問題を歴史から全部切り離して，できあがった資本主義的生産のそれぞれの要素だという形で一面的に捉えたくなかった……

青才　確かにその面はあると思います。ですが，その歴史的なものと要素的なものとの２つを含んだ協業・分業・機械制を説くとした場合にも，それらを「相対的な剰余価値の生産」の内部で説くとそれらが同時に絶対的な剰余価値の生産でもあるという面が弱くなってしまうのではないでしょうか。従来，労働強度の増大を絶対的な剰余価値の生産と考えるか相対的な剰余価値の生産と考えるのかはっきりしていない訳ですが，私は――今大内さんもいわれたように――絶対的な剰余価値の生産の方にはいると思っています。とした場合，機械制のところで機械の償却との関連で労働日の延長や労働強化を問題にするだけではなく，協業や分業のところでも――労働日の延長は言いにくいかも知れませんが――隣りの労働者と競争することで労働強度が増大する等絶対的な剰余価値の生産という側面も問題にすべきではないでしょうか。私は，それを説きうるように編別構成を工夫すべきだと思うのですが。

大内　もしそういうふうに説くのなら剰余価値の生産というところで絶対的剰余価値，相対的剰余価値の概念規定をやって，その次に剰余価値の増大なり増強なりというところで分業等をならべていく，という方式になるでしょう。

青才　ええ。

大内　そしてそれは絶対的剰余価値の生産でもあるし相対的剰余価値の生産でもある，というかたちで説くことになりますね。

青才　分業の場合でも，隣の人がある製品を仕上げればそれにせかされ自己に労働強化を強いるという面があると思うのです（笑い）。

だから，日高さんの場合には編別上は協業・分業のところでも絶対的な剰余価値の生産を説ける構成になっているので――実際には日高さんの場合も，その絶対的な剰余価値の生産の問題は機械制のところでちょっと出てくるだけですが――私は，日高さん的な編別構成がいいと思うのですが。

永谷　ただこういうふうに考えると，相対的剰余価値の生産というのを説明する時に，協業・分業・機械制大工業というのはいわば一つの註というか付録というかな，歴史的な補註であるというふうにして，本文から落とすということも考えられるんだな，つまりあの協業・分業・機械制大工業がないと相対的剰余価値の生産が説明できないか，といったらそういう問題じゃないでしょう。具体的に相対的剰余価値の生産を成立させてきた歴史的なプロセスはどうかと言ったら協業・分業だったというふうにおそらくマルクスでもいってるわけで。

青才　ただもう一つ労働過程をそのように編成したがゆえに資本は労働力をつかめたのだという側面も重要で，それをいうためには一般的な生産力の上昇という側面を言うだけではなく，もう少し具体的な生産様式の話を協業・分業・機械制という形でしないとまずいんじゃないかという感じがするのですが。

小湊　今の点は大内先生のこの本では「機械制生産による資本主義の確立」ということになるんでしょうね。

永谷　だから大内先生の構成，絶対的，相対的，機械制生産による（資本主義の）確立という，この構成は非常にうまいと僕は思うわけです。で，機械制生産の中で具体的に絶対的剰余価値生産も相対的剰余価値生産も行われるんだというかたちでね，そしておそらくその相対的剰余価値の生産から三の機械制に移る一つのプロセスというか移行規定として協業・分業・機械制大工業をその前に説いておくというのがおそらく大内先生の狙いだと思うわけですね。だけどいわば補註のようなかたちに落としたとしても大内先生の構成は生きるような気がするけれど……

大内　その点は，287～288頁にかけての〔88〕で意図を書いておいたつもりですが……。つまり，ある意味では機械制生産だけを取り出せればいい。ただ機械制生産なるものは，ここに書

いておいたように，一定の歴史的な所産であって，しかも機械制生産によってはじめて資本主義が確立するといった資本主義の歴史性は原論の中でもふまえておく必要がある。と同時に，機械制生産の中には協業もあれば分業もあり，要素的側面として両方が統一されて入っている，ということはぜひ説きたかったのです。しかし実際は，マルクスにならって異種マニュファクチュアとかなんとか，そういったものについてまである程度書いたのは，蛇足かもしれません。切ってしまった方がいいのかもしれません。ここもしかし，実際に書いてみると案外書きにくいところですね。例えば290頁の分業などもそれでとくにここの作業場内分業と社会的分業などというのはどういうふうに説明したらうまくいくのか，はなはだ苦労した。

永谷　この本ではやはり三の「機械制生産による資本主義の確立」とそれから賃銀形態論は非常に大内さんらしいね，非常に明快で，従来の説明に満足しないでもういっぺんきちんと展開し直されている，いい部分だな。

青才　ちょっと細かな問題かも知れませんが，私は，時間賃銀・個数（出来高）賃銀という賃銀の形態を前に説いて，その後で労働力の価値の労働の価格への転化という労賃形態（労賃という形態）の成立を説くべきではないかと思っています。時間賃銀とか個数賃銀とかいう賃銀の支払い形態の問題は，その支払い方によって労働時間の延長とか労働強化を促進させるのですから，前で説いた絶対的な剰余価値の生産とか相対的な剰余価値の生産とかいう問題と——共に剰余価値生産を増進させているのですから——強い結びつきがあると思うのですが……。

大内　さあ，賃銀という形態と賃銀の形態とをそう区別する必要があるのかな。後者なしには賃銀というものは成り立たないのですから。それより一番重要なのは，307頁から書いておいたように，賃銀の後払いという性質でしょう。

青才　うーん，私は後払いだけでは労賃形態の成立をちょっといい切れないんじゃないかという感じがしているのです。例えば時間賃銀とか個数賃銀とかの話をしますと後払いにならざるをえないですよね。だから時間賃銀とか個数賃銀とかいう話を前に出しておくことによって，後払いの必然性なり，労働そのものを売ったというふうに実際見えちゃうということが，一層明確にいえるような気がするのですが。

大内　そうかなあ。私は後払いという性質が賃銀には必然的に伴って，それをもう少し細工を細かくして時間賃銀とか個数賃銀とか両方のミックスとか，いろいろ具体的な賃銀形態ができてくると考えているのです。この後払いが何故重要かというと，資本の循環運動を考える時に，賃銀が前払いだとすると，可変資本の部分は一時ゼロになってしまうでしょう。その価値が労働者に渡されてしまうわけですから。そうではなくて，資本としては一定の価値をいつも保持しながらそれが循環するという形が必要なんで，それが後払いということで保証されるわけですね。もちろん，そこはちょっと複雑で，完全に貨幣の回収ができないうちに賃銀は支払われるから，資本の方は前貸しだと思っている。しかし，労働者の方からいえば，もう労働の結果生産された価値が商品の中に体化されてしまい，すなわち価値形成がおわって，したがって資本家がより多くの価値をW′の形で取り戻した時に，賃銀を支払われることになる。それによって一定の価値を持続しながら資本が形態転換をすることが可能になり，流通過程が完成されるのだと考えるわけです。だから賃銀はどうしても後払いでないと困るので，そうでないと極端にいえば，資本の流通形式は成り立たないことになる……

小湊　つまり，労働力という商品の特殊性からそうならざるをえないということのほかに，資本の中にもそうならざるをえないという論理があるということですか。

大内　そう。実体的には形態転換しながらいつも同じ価値を保持しているのは，実は不変資本部分だけなんですね。だけど資本の流通過程というのは可変資本部分も含めて，全部が価値

を維持しつつ循環しているという形で捉えられる。それができる根拠は後払いだというのです。少々そこは屁理屈かもしれないけれど，ちょっと面白いでしょう。歴史的にいうと，資本主義以前から賃銀は後払いだった。その形態を資本主義が受けつぐことによって，それは成り立っているのです。

小湊　もともと，労働力商品というのは人間の人格と結びついておりますのでね，先に払っちゃうと逃げ出すという（笑い）……。

大内　もちろん，おっしゃるように，後払いというのは，労働力の包摂のための手段だという意味もあります。だけど，可変資本が実際は流通的につながらないという性質がありながら，それをつなげたような形にしないと資本にならない。

青才　だけど払っちゃうと逃げちゃうという話とわりと表裏の関係ですね。要するに生産手段は別に逃げないけど労働者は逃げるという話だから。

大内　実質的な話は小湊君のいうとおりで，それも一応ここに書いておいた。しかし，次の資本の流通形式論を考えていく時には，資本は常に一定の価値を維持しながら絶えず形態を変えていくという面を説かなければならない。そうすると生産過程で説いた，可変資本は労働者に一度渡されてしまい，新しい価値生産物から補塡されるにすぎないという実体的な関係とどうやって平仄をあわせるかという問題がでてくるのです。

司会　では次に資本の流通過程にはいります。

大内　レポートでは⑤と⑥の問題提起ですね。この資本の流通過程というところは，ご承知のとおりたいへんむずかしいところでして，どう整理するかという点ではかならずしもまだ定説はないといった方がいいのではないかと思います。おそらく今出された⑤と⑥の問題の一番基礎にあるのは，資本の循環と資本の回転とをどのように整理してつかまえるかという点に関係するのだろうと思います。『資本論』の場合にはこの辺が非常に曖昧でして，循環のところで回転の問題を説いてみたり，回転といいながら循環のことを考えていたりしており，大変ごたごたしています。これにたいして，宇野先生は，循環というのは内容的な，つまり資本そのものの形態転換の側面であり，回転というのは時間的な経過の問題であるという形でひとまず整理されようとしたと思うのですが，しかし宇野先生の場合も十分に整理しきれているかどうか，必ずしもはっきりしない点がある。私の印象では，依然として『資本論』的な曖昧さが各所に残されてしまっている，という感じがします。そこで，一つにはそこのところをできるだけ整理してみたいというのがここの試みでして，第一節を循環とし，第二節を回転とし，そして第一節の方では時間的な要素はできるだけ入れないで，形態転換そのものを扱う，それから第二節の方では逆に，形態転換そのものを問題にするというよりは一循環に要する時間を問題にする，という形で整理しようと考えたのです。

そこで，流通費用を何故このように第三節で扱ったかといいますと，流通費用というのは私は，基本的には回転を促進するための費用であると考えています。もちろん循環のために必要な費用だといえばそうもいえますが，あとで例えば利潤論とつなぐ時，あるいは商業資本論とつなぐ時，一番問題になるのは，例えば流通費用と商業利潤の関係とか，あるいは流通費用が投下資本の中に加わるか加わらないかとかという点ですが，それも利潤率に及ぼす影響という意味では結局は回転を通じて及んでくるわけですね。それから商業資本が独立する根拠も流通費用を節約するということと資本回転を早めるということがある意味では裏表になりながら——裏表という意味は，山口重克君が指摘しているように，この回転と流通費用とは，一種のトレードオフのような関係があるのですね。つまり流通費用を余計にかければ回転が短かくなる，かならずしも対応的に短かくならない点に曖昧さがありますが，多かれすくなかれ，短かくなる——その点をいっているのです。ともかく，そういう問題が将来展開されるための一つの伏

線として流通費用は回転の問題と結びつけた方がわかりいいのではないかと考えたわけです。ですからこの構成は第一節が循環で第二節が回転，そして第三節が流通費用という形になっていますが，一番最初に形態転換をまずそれとして明らかにする。ある意味では循環と回転とは実は同じものを扱っているのですが，これを一つの円形運動，例えば316頁の第5図みたいな形の運動として捉え，一つ一つの環の転形の問題として考えると循環の問題になる。これを常に一定の時間をかけて回っているものとして捉えると回転の問題になる。そしてこの回転運動を早めたり遅めたりするものとして流通費用を考える——こういう形で整理すれば一番うまくいくのではないかと考えたわけです。そういう枠組のなかで，『資本論』はどうも整理が悪くてごたごたしているので，マルクスが循環のところで説いたものを回転の方にもっていくとか，逆に回転のところで説いているものを循環の方に移すとか，というように幾つかのデコボコを整理してみたわけです。まだ多少問題が残っているかもしれませんが，ともかく大分整理がついたような気がします。

それから，剰余価値の流通が何故ここで扱われていないかという点ですが，一つには，『資本論』の剰余価値の流通という問題提起そのものが，実は変な問題提起なのですね。320頁の註10に書いておきましたが，宇野先生は商品資本の循環形式で考えないで貨幣資本の循環形式で考えるからああいう問題が説けなくなるのであって，商品資本の循環形式で考えれば何でもなく説ける話だ，という議論をされていますね。しかし，よく考えてみるとあれは商品資本の循環形式で考えるとか考えないとかというよりも，再生産表式で考えれば何でもなく説ける話で，実ははじめから問題にならないことなのです。再生産表式，つまり社会的総資本の流通という形で考えれば何でもないことを個別資本のベースで考えようとするから説けなくなるというだけの話ではないだろうかと私は理解しています。そういう意味で『資本論』の剰余価値の流通の章をお読みになればおわかりのように，あれは一種の謎解きみたいになっていて，この問題は解けないだろう，さあ解いてみろというようなことをいって，最後に謎解きしてみせるのですが，そうなるとなんだというような話になってしまう。あれはマルクスがどこまで意識したのか知りませんが，表式を説く前に，いわば表式の問題を隠しておいて謎を出すからああいうへんな議論になったのだろうと思います。ですからその問題は表式の方に繰り込んでしまい，そして表式で解けばこの問題は何でもない話だという形で処理すればすむことだと考えたわけです。

資本の流通過程の全体としての構成はこういうことなのですが，ここでおそらくもっとも大きな変革を試みた点は，先に永谷君が指摘されたように，資本の三循環形式という，従来マルクス以来どの原論でも使われてきた論点を思い切ってやめてしまったという点だといっていいでしょう。いいかえれば，資本の三形態つまり貨幣資本，生産資本，商品資本という三つの形態を区別することは非常に重要だと思うのですが，貨幣資本の循換形式，生産資本の循環形式，商品資本の循環形式という循環形式をことさらに分けて，そのおのおのに違った意味がある，そしてある特定の問題は特定の循環形式を使わなければ理解できない，というふうに勿体をつけるのがマルクスのやり方なのですね。そして多かれすくなかれ多くの人々がそれを踏襲してきたわけですし，とくに再生産表式を説く時にはほとんどすべての人がそれは商品資本の循環形式でやらなければ説けない，といったようなことをいうのですね。しかしこの説明自体，私にはどうしても納得できない。確かに再生産表式は商品資本から出発しているでしょう。つまりW′がいかにして実現されるかという問題から出発していることは事実ですが，表式は商品資本の循環形式で考えないといけないという話になると，よくわからない。というのは，一つには，資本の循環というのはあくまでも個別資本の循環なのですね。したがって商品資本の循

環というのも個別資本の循環を考えるしかないものです。しかし従来は多くの人のいい分は——そしてマルクスもそうだと思いますが——商品資本の循環形式を考えると必然的に社会的総資本の循環を考えざるをえなくなり，したがってそこを手懸りにして再生産表式に移ることができるということなのですね。しかし果して商品資本の循環形式で考えると必然的に個別資本ではなくて社会的総資本の循環を考えることになるのか，あるいは逆に社会的総資本の循環を捉えようとすれば，どうしても商品資本の循環形式を使わなければならないのか，こういった議論は私の頭の中では全然つながらない。というのは，たとえ，マルクスのいう貨幣資本の循環形式で考えたとしても，もし諸資本の間の社会的絡み合いという関係を考えようとするならば，G—WのWの所に他の資本のW′がくるとか，あるいはG—W…W′という所のW′が売られる時には他の資本に売られる部分があるとか，といったことは当然のこととして考えなければならないのでして，それは貨幣資本の循環形式で考えたら全く目の中に入ってこない，しかし，商品資本の循環形式で考えると自動的に目の中に入ってくるというようなものではない。見ようとすればどの形式を使おうと見られることだし，単なる個別資本の循環として考えればどの形式を考えても，社会的絡み合いは出てこない。こういうわけで，循環形式を区別することに何か非常に大きな意味があるということが本当にいえるのかどうか，これは実はたいへん長い間，私としては疑問だったのです。なかなかふっきれなかったのですが，まあ思い切って（笑い）循環形式というのをやめてしまったらということで，今回は割り切ったわけです。

それからもう一つ契機になったのは，これもちょっと書いておいたように，実は生産資本の循環形式というのは一番わからない。ある意味で私の循環形式論にたいする疑問はそこから出発したといっていいのかもしれません。というのは，マルクスはそれをP…Pという形で捉えるわけですが，このPというのはWとかGとかいうのとは違う。WとかGとかいうのは商品とか貨幣とかいう具体的な物を意味しているわけですが，このPというのはただ…の所が生産過程の意味ですよ，という符号にすぎない。それをPからPへというから形式的にいっても意味がわからない。それからもう少し内容的にいいますと，Pを仮に生産過程あるいは生産資本として資本が機能している過程と考えると，それには時間がかかりますね。極端な場合には10年もかかるものもありうる。そうすると一体PからPへというのはどこから始まってどこで終るのかというのが実際には規定のしようがない。そういう意味で，これはそもそも循環形式というような形で捉えうるものかどうかというのが私の疑問だったわけです。おそらくマルクスがPからPへといわざるをえなくなったのは彼の場合には本当はWからWへというふうに考えたかったのでしょう。ただWといってしまいますと，まだ商品形態が残る，ですから正確にいえば，Wが商品形態を落として生産過程に入った瞬間を考え，そこをPというかたちでおさえて，もう一回りしてそこまできたところを一循環という形でおさえよう，という考え方をしたのではないかと思います。しかしそれにしてもマルクスの生産資本の循環という規定は一番不明確で何をどういうふうに考えようとしていたのかたいへんわからない。

それに関連してちょっと面白かったのは，これは今回はじめて発見したのですが，『資本論』の英訳本を見ていましたら，316頁に書いておいたように，英訳は言葉をかえて使っているのですね。独語版は全部クライスラウフ（Kleislauf）なんですが，英語版は貨幣資本と商品資本についてはサーキュレーション（circulation）という言葉を使い，生産資本のところだけローテーション（rotation）という言葉を使っています。おそらくサーキュレーション・オヴ・プロダクティヴ・キャピタルというのは英語としては非常にいいにくい。ローテーションといった方が英語にぴったりするということで区別したのだと思いますが，おそらくそれは生産資本

というのは本当に循環するものとして捉えうる性質のものなのか，という問題があるからでしょう。マルクスは何か語呂合わせみたいに貨幣資本の循環，商品資本の循環というから，もう一つ生産資本の循環といわなくては気が済まなくなったのじゃないかと思いますが，生産資本の循環というのは一番無理ないい方ではないかという感じをもっています。

永谷　英訳本では資本の循環と言う時はどういうんですか。

大内　サーキュレーション・オヴ・キャピタルです。

永谷　ははあ，それで生産資本の循環の時だけ……

大内　ローテーションというのです。

青才　第二巻はエンゲルスの監修ですか。

大内　第二巻はウンターマンの訳本ですからエンゲルスは見てないでしょう。エンゲルスがみたのは第1巻のイーヴリング訳の部分だけだと思います。

青才　そうすると，英語の語感としてもサーキュレーションとは言いにくいということ……

永谷　『資本論』では流通という言葉と循環という言葉を区別しているのに，英訳では同じになっちゃうわけですね。

大内　そうですね。

永谷　かえってむしろ資本の循環というところは英訳本も全部ローテーションにした方が……

大内　ただし，貨幣の流通のところはカレンシー（currency）という言葉を使っていたのではなかったかな。流通手段はミーンズ・オヴ・サーキュレーション（means of circulation）だから，資本の循環と同じ言葉を使っているわけですね。貨幣のウムラウフ（Umlauf）の方はカレンシーだったと思います。日高君が“通流”にしたところですね。ここはエンゲルスの手が入っているところです。

まあ，そういう疑問から出発したのですが，実はこの三形式の区別というのは，いろいろご指摘のように，鈴木『原理論』もこれを非常に重要なように解釈していますし，侘美君もそうでしょう。日高君もそれに何かたいへん重要な意味があるようにとっているのですが，どうもどれを読んでみても肝腎の重要性なるものが納得できない（笑い）というのが率直な感想なのです。そこで，私としてはむしろ資本の三形態を区別する，そしてそれが順に形態転換していくということがいえればいいと考えるのです。だから必ずしも貨幣資本の循環で一元的に通そうとしているというわけではなく，循環を論ずる時にはむしろ第5図みたいな形を常に考える。だから頭がどっからはじまっても少しもさしつかえない，どこをおわりと考えてもいい，あるいははじめがあるとかおわりがあるとか考えないで，むしろGからWへ，WからW′へという形態転換そのものを取り出して考えるのが循環論だと思うのです。それから回転として考える時には一循環の時間が問題なのですから，これもどこからはじまってどこでおわってもいいわけでして，GからはじまってG′と考えてもいいですし，W′からはじまってW′と考えてもいいですし——先にいいましたようにPからはじまってPというのはちょっと考えにくいのですが——いずれにせよどこからはじまってどこにおわってもいい。そういうものとして考えるべきではないか。そう考えると，従来循環形式の話として挙げられてきた問題というのは実は，大部分問題がないところに問題を作っちゃったような感じがするのです。そこをできるだけはっきりさせてみたい，というつもりでやってみたわけです。

これに関連して，なかんずく私が嫌いなのは，註8で書いておきましたが，三循環形式で学説史が分かれるという奴です（笑い）。これは横山正彦君が大好きで，彼の学説史には必ず書いてある（笑い）のですが，私はもっとも嫌いで，マルクスがこんなバカな捉え方をしたから後世の学説史がたいへんまちがった，というのが私の説なのです。いずれにせよこの三形式の区別に勿体をつけすぎてしまったのではないかというのが率直な感じなのです。

あと，細かい点はいろいろ問題があるかもしれませんが。ただ永谷君のいわれた点でちょっとわかりにくかったのは，産業資本的形式，資本の流通過程，利潤論が単純に一律に処理されることになりはしないか，というご指摘ですが，そこはもう少し敷衍して説明して下さいませんか。

永谷　それは，三者は流通論，生産論，分配論というそれぞれ異った次元のものであるのに結局どれもG—W…W′—G′のかたちで一律処理することにならないかということです。だから僕の言い方だと，資本の流通過程も結局は貨幣資本の循環形式だけで処理して，利潤論と全く同じ取扱いをしているというふうに思っていたんです。けれど，今先生の説明は，資本の流通過程は円環運動で考えているんだとおっしゃいましたのでちょっと違ってきましたけど，しかしこういうふうに先生の書いておられるような円環運動で考えるというんだったらやはり資本の運動を三循環形式でとらえられるのは資本の流通過程論だけだという考えとそう違わないような気がしてくるんですけどね。流通形態論の産業資本的形式と利潤論では，おそらくただぐるぐる廻っていてどこからはじまるかわからんという議論ではなくて，はっきり，Gからはじまって G′でおわるということを言わないと説けない。ところが流通過程論になってくるとGではじまってG′でおわるだけじゃなくて，ぐるぐる廻っていて，どこからはじまっているとか必ずしも言えない面があるんだというふうに言わざるをえないと思うんで，そうなってくるとやっぱり，三循環形式で考えてみるというのとそう違わないような気がしてくる……

大内　三循環形式で考えるというのは，三つに分けると何かそれぞれ違ったことが明らかになる，という理解だったと思うのですね。しかし，本当に三つの形態に区別するとそれをつうじて違ったことが明らかになるのだろうか。そんなに必然的な結びつきがあるのかというのが私の疑問なのですが。

永谷　ええ，確かにそういうふうに問題を立てられると今までの議論におかしいところがありますけれど，産業資本というのは繰り返してどこからはじまっているか必ずしもはっきりしない……Gから始まる場合も考えられるしPから始まることも，W′から始まることも考えられると，いうのが資本の流通過程論の見方だと思うわけですね。だからそういう意味で考えたら必ずしも三循環形式論は誤り，とはすぐにはならないような気がする……

大内　どこから始まるかという議論をするのなら，私は，いずれにせよ資本はGから始まるといわざるをえない。ただ循環論や回転論ではどこから始まるかという議論をする必要はないし，しようもない，というのです。

永谷　Gから始まるのが基本だけれど，それだけでとらえられない面があるというのが資本の流通過程論の議論で，先生も円を描かざるをえない……

大内　始めがどこといえないから円になるのですね。といってもこの背後には，資本の運動はその中に再生産循環という実体的関係を含んでいるから，絶えず回らざるをえない，という関係が置かれているわけですね。それは，生産過程論ですでに説かれている。ですから流通過程論の場合には，どこから始まるかという議論はそもそもない（笑い）……要するに一連の運動の中で，資本は常に三つの形態を採りかつ捨てるということを繰り返す，それはしかも時間的にそうであるのと同時に，空間的に併行的に，一部分が貨幣資本であり一部分が商品資本であるというふうに並んでいる。そういう関係さえとらえられればそれでいいのではないか。循環の話は，それ以上に何もいうことはないような気がしたのですが（笑い）。

永谷　ここはおそらく青才説と真向から対立するんではないかな。

青才　私はどちらかというと侘美ファンですから……(笑い)。再生産表式と商品資本循環との関連については後廻しにし，固定資本と流動資本との区別と生産(的)資本の循環との関連を問題にします。大内さんも，固定・流動の区別

を生産資本の回転様式の差によって与えられています（330頁）。で，私としては，回転様式で区別すると言われる限り，大内さんも，実質的にはPから始まってPで終る生産（的）資本の循環で見ているという感じがするのです。あるものは数回転で回収されあるものは一回転で回収される，という場合にも，その回収を日高さんのように単に貨幣の回収という点だけでいうと，例えばパン屋が小麦粉を一カ月に一度買ってパンを毎日生産しては売っているという場合には，小麦粉も固定資本だ，ということになってまずいと思います。だから，回転・回収の相違という問題も，一度生産過程にはいったものを次の生産過程を開始する場合に再度補塡しなければならないのか，それとも，まだそのまま使えるのか，という生産（的）資本の循環の問題だと思うのですが。

大内　たしかに，330頁では「固定・流動資本の区別はあくまで生産資本の回転様式の差」といういい方をしていますが，これはちょっと含みがあるのです。まず生産資本にかんする区別であるということがあって，その回転様式が違うというのは君がいうように，いっぺんに価値移転をしてしまうかあるいは部分的に価値移転をしていくかというその差を考えているわけですね。回転は時間の問題だといっても，その時間は，ある形態のところから，もう一度そこに戻るまでの時間で考えるしかありませんから，固定資本の場合は，それが原形に戻るところでおさえるしかない。しかし，こういった関係は，生産資本の循環形式で考えているのかなあ。生産資本という形態でものを考えていることは確かですが，循環形式なのだろうか。

青才　固定資本と流動資本とを区別する時に価値の移転様式で区別するという話ですと必ずしも循環形式から見ているとは言えないと思うのですけれども，価値の移転様式の違いで違うんだという説もあるのに対してことさらに大内さんはそうではなく回転様式の違いなのだと言われていると僕は読みまして，回転様式の違いという話しであればPからはじまってPでおわる生産（的）資本の循環の問題だと思ったのですが。

大内　だから先にいったように，回転というのは一回転する間に必要な時間として考える，その場合にはどこかに出発点があって，同じところに終局点がなければ一回転とはいえない。だから君の話は，生産手段が生産過程に入るところから出発して次にそれが生産過程に入るところまでを一回転としているといっても同じことでしょう。

青才　それをP…P視点からの循環というふうにはいえないですか。

大内　さあ，それはP…Pという循環形式で考えているということなのかな。G…G′で考えたって，その中に含まれる生産資本を取り上げれば同じ議論をしなければならないでしょう。

青才　ある意味では従来の説明の仕方に従っているだけかも知れませんが，例えば再生産表式にしても，商品資本からはじまるんだと大内さんが言われただけで（322頁），私なんかは「ああー，W′…W′で見ているんだ」といいたい感じなのです。ある意味では単に「まくらことば」として，W′…W′から見る，ということをいっているにすぎない訳ですが，その勿体ぶったいい方によって同時に形式上の整理をつけているという面もあるのではないでしょうか。

永谷　僕もその再生産表式論がW′…W′，商品資本の循環でないとおっしゃっている意味がどうもよくわからない……

大内　いや，商品資本の循環でないとはいっていない。表式が商品資本から出発していることはそのとおりでしょう。だけど今までのいい方は，逆なんです。商品資本の循環形式でないと社会的再生産という問題は見えてこない，ないし説けないという議論をしてきたわけです。しかし，なにも商品資本の循環形式というものをわざわざ区別しなくったって，資本の運動の社会的な絡み合いというものを頭の中におけば当然表式的な関係を想定せざるをえない。そしてそれは宇野先生流にいえば，「経済表」なの

ですから，前の年の生産物から出発する以外にないという実体的関係があるのはとうぜんです。商品資本から出発するというのは，それだけのことで，個別資本の循環から抽出された商品資本の循環形式とは関係はないことでしょう。

つまり，個別資本の循環形式という形でいえば――マルクスは事実上そこから出発しているのですが――いかに商品資本の循環形式をひねくりまわしてみても再生産表式はどこからもでてこない。何か商品資本の循環形式と表式との二つをあまり必然的なものとして結びつけようとしたものだから逆に非常に苦労しているのじゃないかと思います。一番それで苦労しているのが日高君だと思うのだが……。

青才　今の問題は，資本循環論において個別資本の循環を見ながら得られた商品資本の循環から資本の社会的関連が見えてくるという問題，それをどう説くのかという問題だと思います。今からの話しは，侘美さん的な資本循環論をまるっきり前提とした話しになりますが，その点について私の考えを述べます。

資本は他の資本と商品流通を介して結びつく訳ですから，ある資本の生産（的）資本と他の資本の生産（的）資本とが直接関連を結ぶということはありえず，貨幣で結びつくか商品で結びつくかしかありません。その場合，貨幣は例えば所得による購買等必らずしも貨幣資本とは限らない訳ですから，貨幣を介して資本が他の経済主体と結びついたとしても，その結びつきは必ずしも資本と資本との結びつきとは言えません。それに対し，W′を介しての結びつきの場合には，労働力商品の問題を労働力と生活手段とを等置することによって消去してしまえば，必ず資本と資本との結びつきになります。W′……W′で見る，というのは，侘美さんが言われているように，他の資本もW′としてのみ問題になるということですから，W′を介して成立している資本と資本との社会的関連はW′……W′で見ることによって明らかになる訳です。

ちょっとわかりにくいかも知れませんが，そもそもの問題は，マルクスがなぜW′……W′循環においては循環の中途に商品Wが登場するが故にW′……W′の立場に立てば資本の社会的関連が見えてくると言っているのか（『資本論』，第二巻，青木，125-8頁），という点にあります。私は，その点を，W′……W′の中途にあるWは他の資本のW′であるが故に，W′……W′で見ると資本の社会的関連が見えてくる，と考えたいのです。だから，私は，商品資本の循環から直接再生産表式へ，と考えている訳ではないですが，商品資本の循環によって社会的関連が見えて来，それをもう一度捉え直したものが再生産表式だ，という形で一応商品資本の循環と再生産表式論との関連は付くと思うのですが。

永谷　うーん，見えて来るというのはなんかおかしいなあ（笑い）……

大内　だけどねえ，貨幣資本の循環で考えたって，見ようと思えば（笑い）見えるでしょう。商品資本の循環でなければ見えてこない，貨幣資本の循環では盲目になるというのはどうもよくわからない。

青才　G……G′で見る場合にはG……G′の中のPもW′も最初のGの転化形態としてのみGのとる形態としてのみ問題になるが故に，Gで他の資本と結びつくのならG……G′でも見えてくるけれどもWで結びつくのならばそうではない，と私としては言いたい訳です――そのへんのことはもう特殊な資本循環の理解を前提にした話になっちゃっていますけれども……。

大内　さあ貨幣資本の循環で考える場合，WはGの転化をしたものに違いないけれども，資本の循環として考える時にはGもWもあくまでも資本価値の形態として考える。だから貨幣であるとか商品であるという形態の前に背後に一定の価値量があり，それがとりあえず貨幣から出発して商品という形態にかわると考えるのです。単に貨幣が商品の形にかわるわけではない。

青才　勿論，一般的に言えば資本の運動は資本価値の変態過程である訳ですが，資本循環論の場合には，それを意識的に循環の出発点にある資本の変態過程として見るのではないでしょ

うか。例えば，同じ資本価値の変態過程であるG—W(Pm)も，G……G′で見ればGを増殖させるための資本投下となり，P……Pで見れば生産的資本（P）の補塡となり，W′……W′で見れば第Ⅰ部門からの商品（W）の購入となる。3つのものがあるというのではなく同じものに3つの側面があり，その3つの側面が3つの循環形式から見ることによって明らかになると考えるべきではないでしょうか。

永谷　僕は，再生産表式というのは商品資本の循環なんだけど，あくまでも最初のW′を総資本生産物として設定しているというだけの話であってね，別にW′……W′でいくと自動的に社会的総資本にならざるをえないとか，そういう議論とは違うと思う。

大内　要するに私が一番問題にしたかったのは，たとえば日高君のこういういい方——といっても，これはだいたい従来の通説にかなり近い説明でしょうが——なのです。すなわち，貨幣資本の循環形式は利潤獲得という動力を明らかにし産業資本の形態的側面を代表する，商品資本の循環形式は社会の全産業資本が生産した総体としてのW′が消費され，またくり返しW′が生産されるという循環を示すから産業資本の原則的側面を代表する，と。そういいながら彼はもう一つ，W′……Ck……W……P……W′という変な循環形式を考えるわけですね。ここで社会的総流通過程というのをいわば密輸入している。そこから再生産表式に移らざるをえないことになっているのです。

青才　だから，日高さんの資本循環論はP……Pは成立しないということをいわれている点においては，資本循環論の比重を少し低めたように一見見えつつも，個別資本から総資本へと資本循環論で移るといわれている点においてはものすごく比重を高めているという感じもちょっと受けますね。

永谷　だから個別資本，総資本という考え方があまりにも形式主義的で，そこをなんか循環形式で謎解きをしようとするものだから無理しているかんじを受ける……

青才　話しは変わりますが，大内さんの場合，流通費用を「資本の流通過程論」の一番最後にもってきたというのは，再生産表式を蓄積論よりも前に説くという大内さんの説と関連あることなのですか。日高さんの場合には関連が強いように思えますが……。

大内　いや流通費用とは直接の関係はないのです。むしろ第三章は第二章を全体として受けているつもりです。これは次の問題に多少ひっかかりますが，生産論の論理展開をするときに，まず生産過程から出発して流通過程にいきますね，この生産過程と流通過程を統一して再生産過程とする——こういうふうにおさえる時に，生産過程，流通過程といったから再生産過程ではもういっぺん生産，流通といくか，あるいは前が生産，流通ときたから再生産論の中は流通，生産といくか，そこのロジックだと思います。これはどちらでも説きうるような感じが私にはするのだが，ここで表式から入る方が自然だと書いたのは，流通過程が前にあるのだから，その流通過程が社会全体としてはどういうふうに絡み合いながら再生産をやっていくかということをひとまず説く，そして，しかしその流通は実は生産過程をその背後におかなければ成り立たないという形でおさえた方が判りいいというのが一つの意味です。それからもう一つは，恐慌論をやっぱり最後にもってきたかったので，それとのつながりを考えると，再生産論の最後は蓄積論におのずからなる，ということです。

青才　分配論の最後にもう一度恐慌論をおく，ということと対応する訳ですね。

大内　ええ。私は恐慌というのが常に一種の締めくくりをしていると理解しているのです。もっともこの点は，恐慌論そのものを原論体系の中でどう扱うかという問題と関連します。戸原四郎君みたいに原論の方は一種の静態，均衡分析で，恐慌論は動態分析だといってしまえば原論の中から恐慌はみんな抜けてしまう。これにたいして大内秀明君みたいに，逆に原論はすべて動態論だ，といえば，今度は原論は恐慌論だけになり，原論がなくなってしまう（笑い）。

そうではなくて原論の中で恐慌論を説く場合には一応生産論・分配論それぞれのパートの締めくくりは恐慌論というか景気循環論でつける，ということで説けるのではないか，という考え方をしているのです。これについては高須賀（義博）君は非常に反対らしくて，恐慌論を二つに分けたのがこの本の一番悪いところだ（笑い）ということを書評に書くといって頑張っているらしい。彼の議論は私とはなかなか調子が合わないのですが。とにかく恐慌を最後に説こうとするとどうも，蓄積論をそのすぐ前にもってこないと坐りが悪いのです。また，流通過程論を間に入れて，宇野先生みたいに——あるいは永谷君もそういう説かもしれないのですが——『資本論』第一巻の第七篇に相当する人口法則の方を再生産過程論の先に出すと，流通過程と再生産過程のつながりも悪くなる感じがします。

永谷　僕の場合にはむしろ流通過程と再生産過程で一つ切れ目がある方がいいという説ですね。

大内　私のつなげ方は，やや形式的にいえば，資本の流通過程では個別資本的に考えているわけですね。しかし資本の流通運動は決して個別資本の運動としては完結しない。まさに社会的な絡み合いの中でしか完結しえないものです。そこでこの絡み合いを説こうとすると，どうしても再生産表式を説かなければならない。しかし表式を説くということは同時に再生産を説くということにもなる。ところが，再生産はその背後に労働力の再生産がなければ説けないものです。そういう意味でもういっぺん生産過程で一応説いた労働力の再生産に戻る。といっても，今度は個別的な労働力の再生産ではなく，社会的な再生産です。それで締めくくれば，恐慌へのつながりも旨くいくという発想なのです。実は，これもどちらがいいか長年迷っていたことで，何遍か講義をする度に年によって前に出したり後においたり（笑い）動揺してきたのですが，だんだん前に出る年が多くなってきて遂にこうなってきたのです（笑い）……

青才　蓄積論と再生産表式論との前後関係に関して２つの点を問題にします。第一の問題は，大内さんの場合，拡大再生産表式において追加労働力の調達という点が問題となりその限界を克服するものとして次の蓄積論があるという展開になっているのですが（362-3頁），実際には蓄積論において労働力の増大が問題になるのではない，という点です。有機的構成の高度化による相対的過剰人口の形成ではあっても労働力の増大ではないのですから，追加労働力の調達という再生産表式の限界を次の蓄積論で克服しているということにはならないのではないでしょうか。

それからもう一つは，大内さんは，「（再生産表式では）労働力の再生産も……生活資料の再生産という視点からのみ捉えられる」（349頁）といわれていますが，その点に関しての疑問です。私は，蓄積論で人口法則を説いてしまえば，労働力（商品）の再生産と生活資料の再生産とを等置することができると思うのですが，その前ですと，ちょっとまだ労働力が重すぎて，等置し切れない感じがするのですが。

大内　だから，表式論では労働力そのものはでてこないで，しかし労働者だけでなく資本家も含めて，人間が生きていくためには生活資料の再生産が不可欠だという実体的関係が現わされるのです。

永谷　だから生活資料を生産すれば労働力商品も再生産されてくるという想定をしている…

大内　いやそれは逆にいっているのです。生活資料は生産されたってそれだけでは労働力が再生産されたことにはならないというのです。

永谷　昔からそのへんは，限界があって次へいくのか，そういう限界があるんだからそれを先に説いておかなければ言えないのではないかという，水かけ論みたいにもなっていますけれども，再生産表式が物の再生産というかたちでありながら同時に社会全体の再生産をも果たしているという言い方もやっぱりしなければいけないのではないですか。

大内　ええ。だからその面は宇野先生式にい

えばまさに経済表なんですね。表式は極端にいえばただ原則的な関係だけを示している。その原則的な関係を，ただ商品売買をつうじてやるから使用価値補塡のほかに価値補塡が必要だ，ということになりますし，そこに資本主義的な特徴があるといえばいえるでしょう。この原則的な関係というのはまさに使用価値補塡ですね。だから，そういう原則的な，人間の再生産という関係をもう一度階級関係の再生産という形にしないと資本主義にならない。それは再生産表式で出てくる生活資料が労働者に売られることによって労働力自体が再生産される，しかしそれは生理的に再生産されるだけではなくて商品として再生産される，という関係をあらためて説かなければならない，ということだと思います。

それから，最初に青才君のいわれた労働力の量的増大の点ですが，資本の有機的構成の高度化に応じて相対的過剰人口が創出されるというのもある意味では量的増大でしょう。統計上あらわれてくる人数はふえないにしても，相対的過剰人口は増加するのですね。

青才　それはそうなんですけれども，その前に，再生産表式の場合には構成を同じでやるから労働力の増大がないと困るという限界が出てくるのであって，その限界は本当の意味での限界ではない，という点をいいたいのです。この構成の問題も，私としては，蓄積論でその変化の問題をすでに説いているから再生産表式論では問題にしなくともいいと考えていますが。

大内　いや，私は再生産表式の中にはそもそも構成の高度化などというものは入りえない，というか，表式はそういうものを入れても意味のない論理の立て方だと思っているのです。それは別に労働力の問題とは関係がない。レーニンからローザ・ルクセンブルクに至るまで，構成高度化を再生産表式の中に無理に入れるから変なことになってしまったのです。ですから，前に説いてあるから表式論では構成高度化を説かないというのじゃなくて，表式で説明できるのはここまでであって，これから先は表式でいおうとすると無理なことになるということなのです。だからここではマルクスのやっているような奢侈品，必需品の区別もおとしてしまったし，宇野先生が苦心惨胆された金生産も貨幣材料再生産もみんなおとしてしまった。それは表式を使ってそんなとこまでいわなくてもいいではないかというか，むしろそういうことをいうのはそもそも無理ではないかという考えがあってのことなのですね。ことに金生産はね。

永谷　そうすると結局金生産はどこに入っていることになるんですか。

大内　どこに入っている，というのは？

永谷　社会的総生産物のなかに含まれているということはお考えになっているんでしょう。

大内　もちろんどこかに含まれていますね。つまり生産手段としての金だったら第Ⅰ部門でしょうし，消費資料としての金だったら第Ⅱ部門でしょう。貨幣用金は，強いていえば消費資料なのでしょうが，貨幣用金というのが固定的にあるわけではなく，使用価値としての金との間を融通無礙に動いているわけですから，どっちともいえない面がある……

永谷　ええ，どっちにもなりうるという性格がありますね。

大内　つまり表式でいう二つのアプタイルング（Abteilung）（部門）に分けるという発想の中には，そもそも金生産とか，況んや貨幣用金生産とかという部門は入りえない関係にあるのですね。

永谷　だけどその中に金生産もどっちかに含まれているんだ，ということ自身は指摘する必要はあるでしょうね。

大内　それは，どちらの部門にも含まれているというだけのことですね。その点では，木綿だって，鉄だって変らない。それを何か金生産部門とか貨幣材料生産部門とかというふうに区別しようとすると，あとの第三巻でいうツヴァイク（Zweig）に近づいてしまうのだと思うのです。ここでいう二部門分割というのは——アプタイルングというのは，もっとずっと抽象的な，しかも結果において生産手段として使われたものと消費資料として使われたものを逆に遡

って反映したものですね。だからそれぞれの産業部門（ツヴァイク）は，極端にいえば，すべて両部門にまたがっているという形になっているわけです。そういうイメージでとらえないと表式論というのはうまく片付かない。そこへ中途半端にいろんなものを入れるから，だんだん産業連関表みたいな扱いになる危険性がでてくるのです。

永谷　それはあるけれど，アプタイルングのかたちでないにしてもとにかく二部門の中に金生産も含まれているんだという指摘はいると思うんですよね，それをわざわざ分けて量的に説明するかどうかはともかくとして……

大内　それは入れた方が親切かもしれません。

永谷　そうでないと，価値法則は，やっぱり貨幣の価値尺度を通して成立している，あるいは労働配分もね，金生産物としての貨幣による商品の購売によって成立するという論理が貫徹しないと思う……

青才　貨幣との絡みでの金の問題ですね。

永谷　そうそう……金はすべて貨幣じゃないんだけれど，貨幣の金も金生産物の中に含まれているんだ，と言う必要はあると思うんだな。

大内　表式論に具体的な条件を入れだすと貨幣材料だけではなく，ほかのものもいろいろ入れたくなるのじゃないの（笑い）……奢侈品，必需品という区別，その次には固定資本財と流動資本財という区別とか，しまいには軍需生産部門とか……。山田盛太郎先生式になって，だんだん表式を事細かにしていけば遂に産業連関表に到達するという発想につながるのだけど，これは完全に表式の誤解ですね。

青才　それはそうです。だから第Ⅱ部門には生活必需品も入っているだろうし奢侈品も入っているだろう，その他何々も入っているだろうという，それどまりの話でいいと思うのですけど。

大内　しかし，貨幣材料というのは二部門のどっちにも入らないともいえますね。もっともどっちにも入らないからという議論をしだすと，ある一時はやりになった，軍需生産などもどの部門に属するかわからない。

青才　でも強いて言えば第Ⅱ部門でしょう。

小湊　第Ⅱ部門ですね。それで，先生のばあいどっちにも入らないということはどっちにも入るということですか……？

大内　だって生活資料じゃないでしょう，大砲は（笑い）……

青才　ですが，剰余価値で買われるんだから生活手段ではなくとも消費手段ではある訳で，だから軍需品としての大砲は——貨幣材料もそうですが——第Ⅱ部門ではないでしょうか。

大内　しかし，表式の説明では貨幣というのは実は貨幣なしに物々交換でもいいような関係をひとまず想定しておいて，貨幣はただそれを媒介しているにすぎない。だから出発点からグルッと回って元に戻ってしまう。まさにケネーの経済表における貨幣の扱い方と同じ扱い方になっていますね。それを，磨損した部分が別にある筈だという議論をしだすと，何か表式の約束と別の話をもってきているような感じがしてしょうがない。

永谷　ただ大内先生のようにおっしゃるとね，貨幣が労働切符みたいな感じにみえるようになっちゃう……

大内　表式はそもそも先にいったように原則であって，使用価値補塡の関係を一番基本においている。ただそれを商品交換関係を通じて実現しなければならない限りで価値補塡が必要だということになるのです。そういう観点に立てば，貨幣はその限りにおいては単なる媒介手段にすぎなくなってしまう。『資本論』も表式のところではどうもそうしか扱ってないと思うのですがね。だから最初に200なら200の貨幣があって，それがＩＫから出発してＩＬにいってⅡＫにゆき，またＩＫに戻るというふうに結局一年のおしまいには貨幣は出発点に戻っているというだけの話になってしまう。その程度でいいのではないかしら。磨損したとかしないとかという話は表式の枠組みの中には入りきらない。

司会　それではこのへんで生産論の検討会をおわりにしたいと思います。